

北谷の縄文

～交流の軌跡～



大洞系土器

北谷町教育委員会所蔵

平安山原 B 遺跡出土

遮光器土偶

弘前大学所蔵

青森市新城地区出土



北谷町教育委員会

1. 北谷の縄文

1-1. 南島の縄文時代

日本列島では、今から約 15000 年前から 2500 年前までの約 13000 年におよぶ狩猟採集を基本的な生業としていた頃を縄文時代と呼んでいる。

沖縄・奄美においては、約 7000 年前の南島爪形文土器の頃からとして知られる。



南島爪形文土器
(伊礼原遺跡)

1-2. 北谷町の縄文時代の遺跡

2018 年（平成 30 年）現在、本町では 57 遺跡が確認されており、うち縄文時代の遺跡は 10 カ所ある。

なかでも伊礼原遺跡からは、約 7000 年前から 2500 年前の縄文時代の人々が、豊かな自然環境下で現在も枯れることなく湧き出る湧水（ウーチヌカー）を中心に暮らした様子がわかった。また、県内で初例となる貴重な品々が相次いで出土したことから、2010 年（平成 22 年）に国指定史跡となった。

1-3. 伊礼原遺跡から分かったこと

① 約 7000 年前～ 2500 年前の古環境

・ 海岸線や海中の様子

縄文時代には、地球規模の環境の変化により海水面が上昇・下降（海進・海退）した。海進のピークにあたる約 7000 年前には、現在よりも最大 5 m 程度、上昇していたといわれ、現在の北谷町役場付近まで海が迫っていたと思われる（p2 左図参照）。また、約 5500 ～ 5000 年前までは、伊礼原遺跡の前面に広がる海岸は干潟であった。その後、しだいにサンゴ礁に囲まれた浅い海（沖縄方言でイノー）に変化したことが分かった。

・ 森林の様子

丘陵には、様々なドングリが実る豊かな照葉樹林が広がっていた。ふもとの湧水が流れる一帯は、湿地となっており河口にはマングローブ林が形成されていた。海浜部には海浜の広がりとともに砂丘が形成され、後背にはアダンを中心とした海岸林が形成されていた。

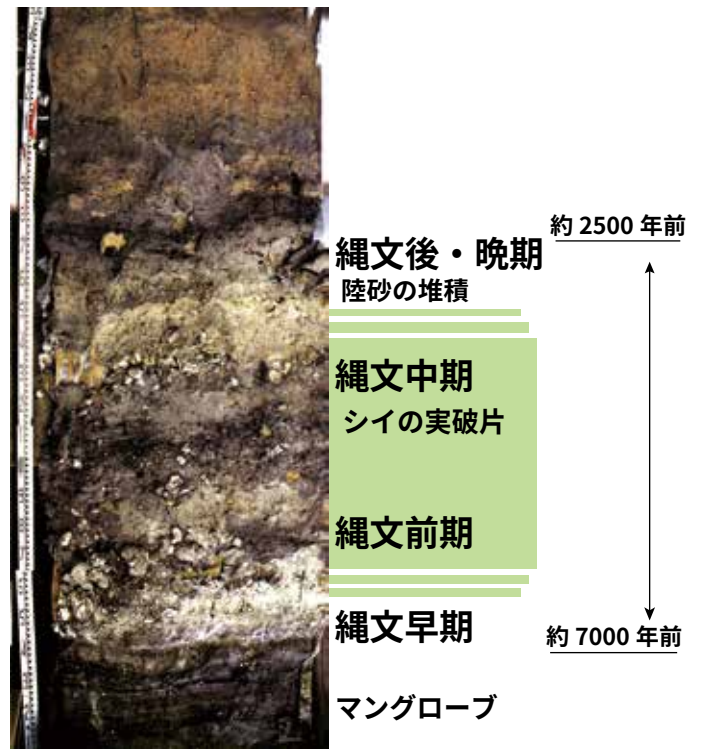


縄文時代晩期（約 2500 年前）の海岸線



町内の縄文時代の遺跡分布と海拔高度

※(株) パスコ：パスカル・ウェブの画像データに加筆。



伊礼原遺跡の地層（低湿地区：中央区）



サンゴ礁がひろがる現在の砂辺海岸

② 暮らしの様子

陸地の広がりとともに変わる生活域の変遷をみると、約 6800 ～ 6000 年前は、まだ低地は狭く丘陵ふもとの湧水近くで暮らしていた。約 5500 ～ 5000 年前になると湧水周辺の湿地に加え、海側の低地を利用するようになり、湿地は調理場やドングリの保存場所として利用されていた。約 3500 年前は、発達した砂丘に竪穴敷石住居を構えた集落がつくられ、約 2500 年前には、現在と同様のサンゴ礁に囲まれた海を目の前にした暮らしを営んでいた。

また、湧水周辺の豊富な地下水を含んだ土中から、ザルや、当時食していたであろう各種ドングリ、木製のくし、木製容器などが良好な状態で出土し、当時の食生活実用品等を知る上でも極めて貴重な発見となった。

③ 人々の交流

遺跡の出土物より縄文人の活発な動きが見えてきた。沖縄島北部で産出するチャート製の矢じりや石さじ（皮を剥ぐ道具）、九州から持ち込まれた土器や黒曜石、新潟県で産出するヒスイが出土した。さらには、伊礼原遺跡に隣接する平安山原 B 遺跡からは、東北地方の影響を受けた縄文土器が出土するなど、北谷に暮らした人々の痕跡から、多くの謎に包まれている縄文人の交流の一端を知ることができた。

2. 北谷の自然環境

2-1. 沖縄島の一般的な地質・植生の特徴

沖縄島の植生は、地質の違いにより南北で大きく変わる。そのおおよその分かれ目は、右図の赤線で示した比謝川、天願川をつないだラインとなっている。

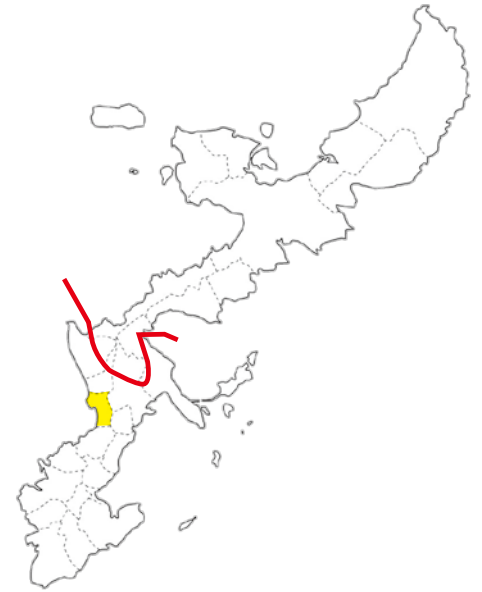
北部には赤土の酸性土壌がひろがり、南部にはかつて海だったとき形成された石灰岩などが隆起してできたアルカリ土壌が広がっている。

※本部半島の古琉球石灰岩など例外もある。

北部の森は、酸性土壌を好むイタジイを中心とした森林が形成され、森はもこもことブロッコリーのような形になる。

(p4 写真参照)

一方、南部にはアルカリ土壌を好むアカギやタブノキ、オオバギ、ヤブニッケイなどを中心とした森が形成される。(下図右写真参照)



2-2. 北谷町の地質・植生の概要

北谷町は、北部から続く赤土酸性土壌の分布南西端にあたり下図左赤色で塗られた場所がその地域となっている。赤土の土地は、いわゆる北部のやんばるの森と同じような森がかつては広がっていたと考えられており、桃原公園にはイジュをはじめ北部の特徴をもった植生が残されている。

緑で塗られた場所は、石灰岩を主体としたアルカリ土壌となっており、白比川・新川流域にまとまった森が残っている。



凡例

赤...国頭礫層
(酸性土壌)

緑...琉球石灰岩
(アルカリ土壌)

北谷町周辺の地質

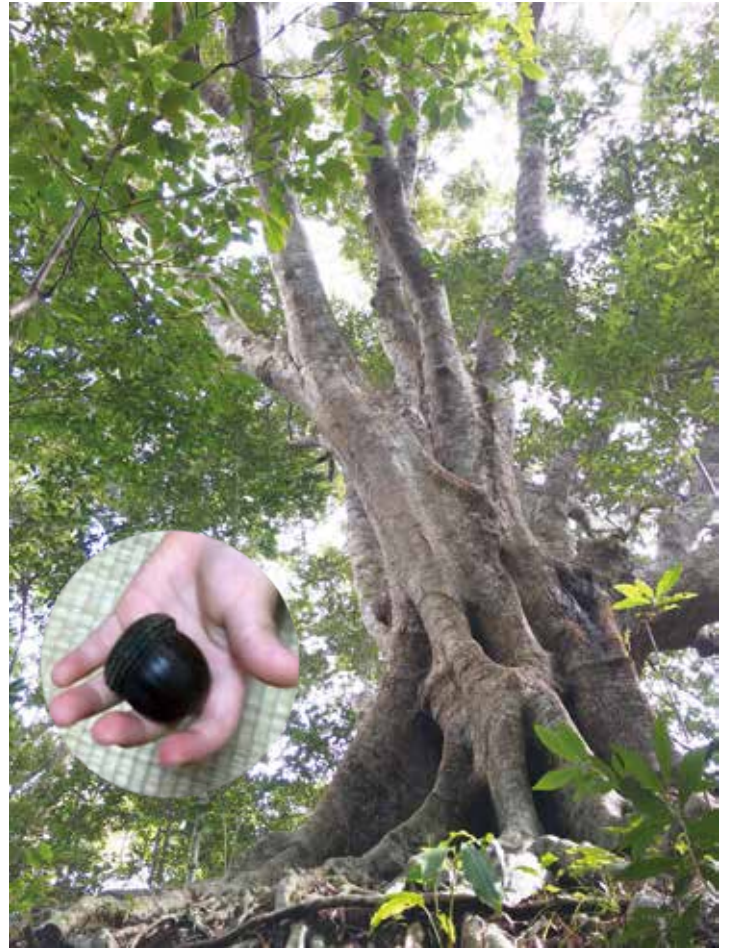
※(株)パスコ:パスカル・ウェブの画像データに加筆。



北谷町、白比川・新川流域には、アルカリ土壌の森が広がり、開発が進む中部域に残された希少な緑になりつつある。



イタジイが優占種となる赤土酸性土壌の森



日本一大きなドングリをつけるオキナワウラジロガシ
(左右共に国頭村)

2-3. ドングリからみえる北谷の豊かな縄文

現在北谷町は、中部を代表するリゾート地として発展しており、森林のイメージは想像しづらいが、わずかに残された街中の緑地や遺跡から出土した各種ドングリなどから、当時の豊かな北谷の自然を想像することができる。

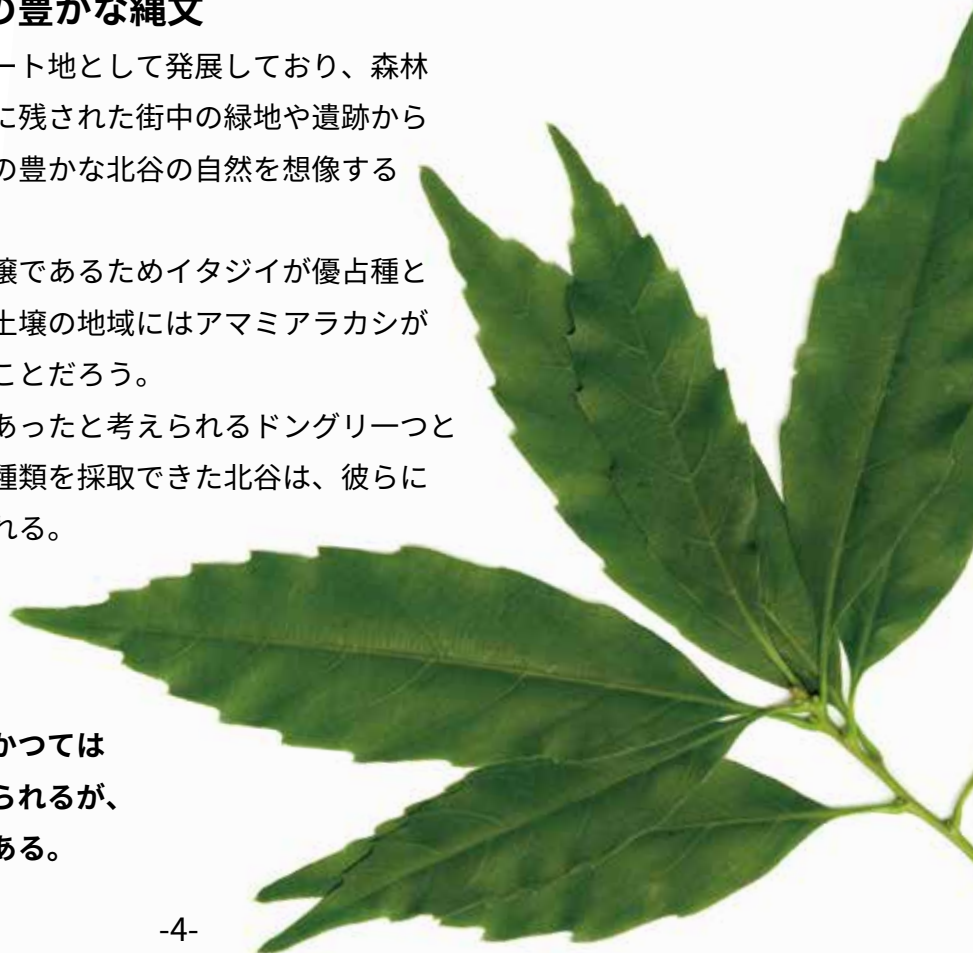
上勢区や、桃原区あたりは、酸性土壌であるためイタジイが優占種となった森が広がり、その他のアルカリ土壌の地域にはアマミアラカシが多く生育する豊かな森が広がっていたことだろう。

当時の縄文人にとって重要な食料であったと考えられるドングリ一つとっても、他地域と比べて近場で多くの種類を採取できた北谷は、彼らにとっても住みやすい地域だったと思われる。

～アマミアラカシ～

アルカリ土壌を好み、石灰岩質の土地に生育するドングリの木。

伊礼原遺跡からも出土しており、かつては町内にも多く生育していたと考えられるが、現在では数本残されているのみである。



3. 人々の暮らし

3-1. 縄文時代（早期）

約 6800 年前

今から約 6800 ～ 6000 年前、丘陵ふもとより湧き出る湧水周辺より人々の生活の痕跡がみられた。

遺跡からは、南島爪形文土器や打製石斧、地面に火を起こした際の炭化物が見られる。当時の人々の住居跡は確認されていないが、おそらく丘陵上またはその岩陰等を利用していたと想定される。



南島爪形文土器出土状況（伊礼原遺跡）

3-2. 縄文時代（前期～中期）

① 約 5500 年前（前期）

湧水の脇からは、堅果類（イタジイ、オキナワウラジロガシなど）を貯蔵した県内最古のザル（リュウキュウチク）や、ドングリ類の破碎した殻（様々な植物の種子）が腐敗することなく良好な状態で出土した（p6 コラム参照）。

植物遺体の保存が難しい亜熱帯気候の沖縄で、これらが出土したことはとても貴重なことで、動物、魚介類以外の植物食糧が明らかになったことは重要な成果の一つである。



縄文前期の海岸線

湧水の下流域からは、九州で作られた^{そばた}曾畑式土器が出土し、交流があったことを示唆している。また、石器や木製品、貝殻、獣魚骨が出土したほか、犬の骨とその糞石が見つかったことから当時より犬と生活を共にし、狩猟をしていたのではないかと考えられる。



出土直後のザル（上）オキナワウラジロガシのドングリ（右）。



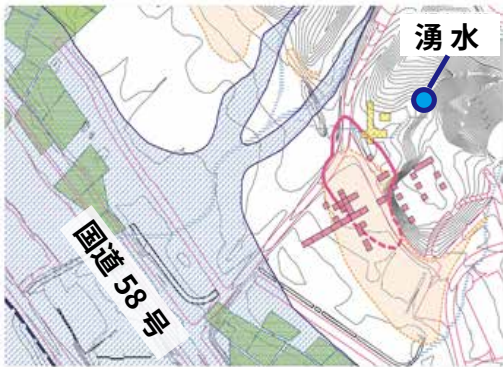
上：イノシシ頭骨
左下：イヌ頭骨
中下：イノシシ肩甲骨
右下：イノシシ顎骨

② 約 4500 年前（中期）

湧水の流域に形成された湿地からは、前述同様に保存状態の良い木製容器、石器、土器、獣魚骨、貝殻などが出土している。

また、このころの海岸線は、地球全体の寒冷化に伴う海面の低下により後退し、あらわになった低地には海砂が堆積し砂丘が形成されるようになる。

砂丘上には、住居の跡と考えられる柱穴や炉跡などの痕跡が見られ、周辺からはジュゴンなどの海獣骨や獣骨、貝製品を素材とした装飾品が多く出土した。



縄文中期の海岸線



石斧の柄 [素材：クチナシ]（伊礼原遺跡）

コラム

～数千年間真空パックされた植物たち～

伊礼原遺跡では、湿地の水分をたくさん含んだ土に真空パックされた状態で、様々な植物が出土した。

右のドングリの殻の写真は、当時北谷に暮らした縄文人の食べかすで、昨日ゴミ箱に捨てたのではないかと見間違えるほど新鮮な状態で出てきた証拠写真である。

しかし、これらは取り上げられ空気に触れた瞬間、みるみるうちに酸化し真っ黒になってしまったようだ。現場に立ち会うことのできた方々は浦島太郎が玉手箱を開けた時の感覚を覚えたことだろう。羨ましい限りである。

もう一つ小話を。縄文時代に食べられた植物の代表としてドングリが挙げられるが、なかにはとても美味しいフルーツも出土している。右下の写真にあるシマサルナシである。この仲間の植物を栽培用に品種改良したものがあのキウイフルーツである。味もまさにキウイフルーツで、縄文人も舌鼓を打ったことであろう。



出土直後のドングリ（イタジイなど）の殻



左：シマサルナシの種（伊礼原遺跡）

右：シマサルナシの実（採取地：やんばる）

3-3. 縄文時代（後期～晩期）

① 約 3500 年前（後期）

引き続き海岸砂丘は発達し、砂丘上には、楕円形に砂を掘り込み床に石を敷いた住居跡が発見された。付近からは、ドングリなどをすり潰す際に用いる丸い石とともに石皿が出土したほか、イノシシの骨や貝殻で作られた装飾品も見られ、生活の一端をうかがい知ることができた。また、湧水周辺からも土器などが出土している。このことから、砂丘上を生活の拠点とし、湧水周辺も活動の場として利用していたことが明らかとなった。高波（台風等）により砂丘上の住居が浸食された痕跡もみつまっている。



おもなわとうとう
面縄東洞式土器
(伊礼原遺跡)


コラム

～土器からわかる時代編年～

遺跡から出土する様々な遺物は、過去を物語る重要な証拠物である。近年、様々な分析技術が発達し、遺物の年代や産地等をより詳しく知ることができるようになった。

なかでも土器は、時代や地域などによって形や文様の違いが明瞭である。そのため、土器が作られた時代を特定し、この変遷を整理・研究することにより、例えばある遺跡の発掘現場において土器が出土した際、これを見るだけで、おおよその年代、時代背景等を推測することができる。

沖縄諸島における縄文土器編年表

時期 区分	早期 約6800年前		前期 約5500年前	中期 約4500年前		
	主 な 土 器					
条痕文土器 クマヤー洞穴遺跡		爪形文土器(ツメノフチ式) 渡具知東原遺跡	曾畑式土器 曾畑貝塚(熊本・参考)	船元系土器(搬入) 伊礼原E遺跡	面縄前庭式土器 伊礼原遺跡	仲泊a式土器 伊礼原E遺跡
						
		爪形文土器 伊礼原遺跡	曾畑式土器 伊礼原遺跡	船元系土器(搬入) 伊礼原E遺跡	面縄前庭式土器 伊礼原E遺跡	仲泊a式土器 伊礼原E遺跡
						
			室川下層式土器 伊礼原遺跡		仲泊b式土器 仲泊遺跡	
						
			室川下層式土器 伊礼原遺跡			

② 約 2500 年前（晩期）

湧水周辺から木製のくし（ヤエヤマコクタン）が発見された。砂の堆積に伴う平坦地の広がりには更に進み、煮炊きに使用されたと思われる石囲い炉跡や、埋葬された人骨が出土した。

沖縄では産出しない鉱物、佐賀県腰岳産の黒曜石や新潟県糸魚川産のヒスイが出土し、縄文時代の交易は鹿児島及び西北九州を経由し、日本海を北上又は南下していたことが伺える（p9 参照）。



























くし（伊礼原遺跡）

下の表は、主に沖縄諸島の遺跡から出土する縄文時代の土器を時期ごとに並べたものである。表の左側が古く、右へ行くと新しくなる。表全体を見ると、各時期で形が異なっていることが判る。

土器の底の部分に着目すると、早期から中期にかけては丸や尖った形をしているが、後期に入ると市来式土器を境に平たくなり、晩期になると再び丸や尖った形となる。形が変化する原因としては、食べ物の貯蔵方法や調理方法の変化、九州など他地域の土器の影響を受けたことなどが考えられる。

（白黒写真は各遺跡報告書より引用）

縄文時代						
後期 約3500年前			晩期 約2500年前			
						
市来式土器 浦添貝塚	嘉徳Ⅰ式土器 伊礼原遺跡	伊波式土器 伊礼原遺跡	大山式土器 クマヤー洞穴遺跡	宇佐浜式土器 クマヤー洞穴遺跡	大洞系土器（搬入） 平安山原 B 遺跡	阿波連浦下層式土器 平安山原 B 遺跡
						
面縄東洞式土器 古我地原貝塚	嘉徳Ⅱ式土器 古我地原貝塚	伊波式土器 伊波貝塚	大山式土器 大山貝塚	カヤウチバンタ式土器 大山貝塚	皿形土器 伊礼原遺跡	阿波連浦下層式土器 平安山原 B 遺跡
						
面縄東洞式土器 伊礼原遺跡	台付皿形土器 伊礼原 E 遺跡	荻堂式土器 伊礼原遺跡	室川式土器 久里原貝塚	室川上層式土器 室川貝塚	縄文晩期系土器 伊礼原遺跡	阿波連浦下層式土器 平安山原 B 遺跡
						
面縄東洞式土器 伊礼原遺跡		荻堂式土器 室川貝塚	喜念Ⅰ式土器 苦増原遺跡	仲原式土器 シヌグ堂遺跡	縄文晩期系土器 伊礼原遺跡	阿波連浦下層式土器 平安山原 B 遺跡

4. 遠隔地との交流を示す発見

4-1. もたらされた技術・品々

縄文時代前期以降、沖縄・奄美（南島）と九州島では断続的な交流が行われた。町内の遺跡からは、その証拠が数多く発見されている。

① ザル

右上の写真は、伊礼原遺跡で発見されたザルである。発見時、このザルには土砂とともにドングリが入っていた。出土した状況から、あく抜きをするため湧水に浸していたものと考えられる。

ドングリなどの堅果類を食す処理法やザルを編む技術は、九州・本州の縄文遺跡で多く確認できる。



竹ザル（伊礼原遺跡）



滑石混入の曾畑式土器の破片

（左：伊礼原遺跡、右：伊礼原 E 遺跡）

② 搬入土器

交流を示すモノとして、島外からもたらされた土器（搬入土器）が多く発見されている。

北谷町で出土した搬入土器の代表例に、伊礼原遺跡から出土した曾畑式土器が挙げられる。この土器は縄文時代前期に西北九州で広く分布し、九州（西北部・中部）で作られるものには、南島では産出しない鉱物（滑石）を粘土に混ぜるものが多くみられる。町内出土の曾畑式土器約 3500 点中、滑石の混入が数点認められた。僅か数点ではあるが、人とモノの移動を語る貴重な発見と言える。

その他、瀬戸内地方を中心に分布した船元Ⅱ式土器（中期）、南九州に分布する市来式土器（後期）、東北地方一帯に分布した亀ヶ岡式（系）土器（晩期）など、各時期の搬入土器が伊礼原周辺から出土している。



船元Ⅱ式土器（伊礼原 E 遺跡）

③ 黒曜石とヒスイ

縄文晩期になると佐賀県腰岳産の黒曜石と新潟県糸魚川産のヒスイが伊礼原遺跡をはじめ県内に数十ヶ所で出土している。

黒曜石は火山岩でガラス質の硬い石である。鋭利であるため矢じりや刃物として利用している。

ヒスイは緑色を帯びた非常に硬い石で、主に装飾品として利用され、当時は光沢があり大変魅力的なモノであったと思われる。これら石材は鹿児島及び西北九州を経由し、日本海を北上又は南下する流通航路があったと考えられる。



黒曜石（伊礼原遺跡）



ヒスイ（クマヤー洞穴遺跡）

④ シカの角

伊礼原遺跡の縄文時代前期の地層から出土した。シカは絶滅していることから、九州から土器などの交易品として持ち込まれたものである。用途は不明だがシカの角は石器を加工する道具として適していることから、その道具としての可能性も考えられる。

⑤ キジ

キジの骨が縄文時代前期の地層より出土しているが、沖縄には生息していないことから食用として持ち込まれた可能性が考えられる。

⑥ 装飾品を身につけた人

北谷町砂辺にあるクマヤー洞穴遺跡（縄文時代前～晩期）では、縄文時代晩期に墓域として利用され、50 数体の人骨が発見された。人骨とともに、副葬品とみられる貝を加工した腕輪やヒスイの装飾品が出土している。

※クマヤー洞穴遺跡で発見された人骨の特徴

人骨から推定される身長は、男性が 156～161cm、女性が 148～149cm と現代人よりやや小柄であった。また、下あごの歯（切歯）を抜いている例が 9 体確認された。



クマヤー洞穴 現況

4-2. 交流の軌跡を示す「モノ」

① 南から北へ

縄文時代、日本本土と南島は様々な「モノ」が行き交いした。

搬入土器としては沖縄本島で作られた室川下層式土器むろかわかそうや、奄美諸島で作られた面縄西洞式土器おもなわせいどうが九州で見ついている。これらが発見された遺跡は鹿児島県の薩摩半島に集中している。

また、装飾品としては、南海産のイモガイ製品が九州以北広域にもたらされていることが分かっており、驚くべきことにこれらの貝は南島から約 2100 キロ離れた北海道からも出土し、当時の人々の壮大な動きが見られる。

② 次の時代へつながる道

弥生時代に入ると南島と九州地域との交流はさらに活発になった。南島のゴホウラや大型イモガイといった貝は北九州の弥生社会で珍重され、南島は貝交易の拠点としてにぎわうようになった。

南海産の貝を利用した貝輪は主に北九州の弥生人に重宝され、首長など権力者であることを示す装飾品であったと考えられる。南島の遺跡からは貝輪の素材となるゴホウラや大型イモガイを交易に備えてストックした貝集積が確認されている。



ゴホウラ・大型イモガイ等の貝集積

5. 北谷町出土の亀ヶ岡系土器

5-1. 謎の土器の発見

2016（平成 28）年、北谷町平安山原（はんざんばる）B 遺跡の出土品を整理している際、沖縄では見られない土器が確認された。

この土器の文様は、縄文時代晩期の東北地方で多く作られた土器に類似していた。そのころの東北地方では豊かな文化が育まれ、この地方で作られた土器は「亀ヶ岡式土器」と総称される。一方でこの造形豊かな土器の模倣品が全国各地で見つかっており、これらは「亀ヶ岡系土器」と呼ばれている。

この土器が北谷町から出土したことにより、これまで奄美地方が南限とされていた亀ヶ岡文化の影響域は沖縄島まで及ぶことが確認され大きな話題となった。

5-2. 誰がどこで作ったか？

① 誰が作ったか？

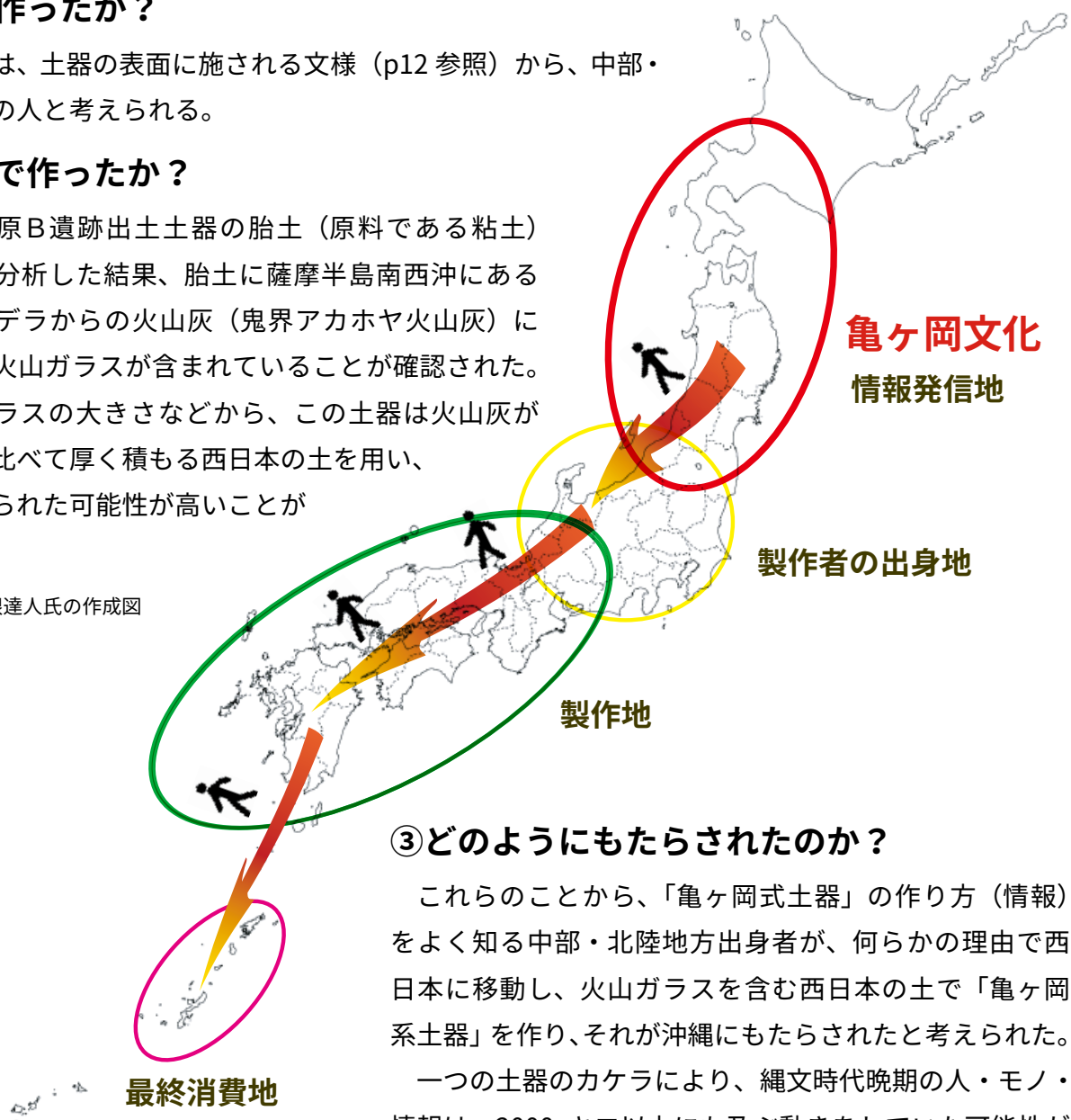
制作者は、土器の表面に施される文様（p12 参照）から、中部・北陸地方の人と考えられる。

② どこで作ったか？

平安山原B遺跡出土土器の胎土（原料である粘土）を理化学分析した結果、胎土に薩摩半島南西沖にある鬼界カルデラからの火山灰（鬼界アカホヤ火山灰）に由来する火山ガラスが含まれていることが確認された。

火山ガラスの大きさなどから、この土器は火山灰が東日本と比べて厚く積もる西日本の土を用い、同地で作られた可能性が高いことがわかった。

※右図は関根達人氏の作成図に加筆した。



③ どのようにもたらされたのか？

これらのことから、「亀ヶ岡式土器」の作り方（情報）をよく知る中部・北陸地方出身者が、何らかの理由で西日本に移動し、火山ガラスを含む西日本の土で「亀ヶ岡系土器」を作り、それが沖縄にもたらされたと考えられた。

一つの土器のカケラにより、縄文時代晩期の人・モノ・情報は、2000 キロ以上にも及ぶ動きをしていた可能性が示されることとなった。

5-3. 工字文

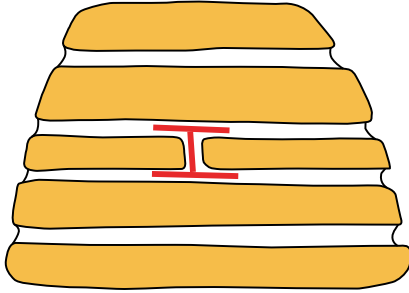
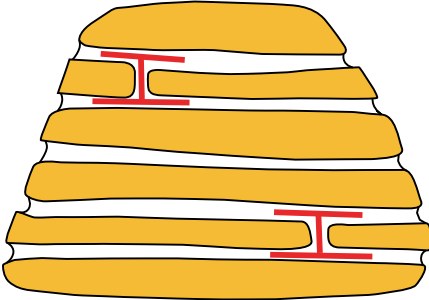
平安山原 B 遺跡で発見された亀ヶ岡系土器の表面には、「工」の字に似た文様（工字文）が確認できる。工字文は、地域によってバリエーションが異なり、東北地方を中心に作られる亀ヶ岡式土器では工字文を 1 段、中部・北陸地方では工字文を上下 2 段施す特徴が見られる。

本町出土の亀ヶ岡系土器には上下 2 段の工字文が見られることから、中部・北陸地方の文様構成に類似する。



亀ヶ岡系土器（平安山原 B 遺跡）

地域による工字文の違い

地域	土器名称	文様（イメージ）	主な特徴
東北地方	亀ヶ岡式土器		工字文は1段
中部・北陸地方	亀ヶ岡系土器		工字文は2段（複数段）

※上記の表は、説明用に図や特徴を簡素化したものであり、実際は年代や地域によって複雑化する。

5-4. もう一つの「工字文」

亀ヶ岡系土器の発見後、町内の他遺跡からも工字文を持つ遺物が確認された。

右図は平安山原 A 遺跡出土の土製品で、平安山原 B 遺跡出土の亀ヶ岡系土器に比べ工字文は雑に施されている（矢印部分）。また、胎土にはサンゴ由来の可能性がある小さな白色粒が含まれており、文様の粗雑さや胎土の質などから東北地方で作られたものではないことが明らかとなった。

このような資料は沖縄県内でも類例が無いため、今後類似資料の増加が望まれる一品である。



工字文のある土製品（平安山原 A 遺跡）

～ 縄文の造形 ～



冬の青森 八甲田山方面

【亀ヶ岡文化】

今から約 3000 ～ 2200 年前の縄文時代の終わり頃（縄文時代晩期）、東北地方と北海道の南西部（渡島半島）までの広がりを持つ縄文文化を「亀ヶ岡文化」と呼び、青森県つがる市の亀ヶ岡遺跡が名前の由来となっている。

この文化圏からは、美しい工芸品のような土器や製品が出土し、加えて多種多様な祭祀具が多く発見されているのが大きな特徴と言える。

遺物の内容は、精緻で洗練された模様や作りが特徴の「亀ヶ岡式土器」や、現代とほぼ同様な塗り重ねる技法を用いた「漆製品」、そして有名な「遮光器土偶」に代表される土偶や土製仮面、岩偶、石棒等の様々な祭祀具である。



遮光器土偶（縄文時代晩期） 青森県つがる市 亀ヶ岡遺跡



秋の青森 大森勝山遺跡と岩木山



台付浅鉢（縄文時代晩期）
※北谷町で出土した土器のモデル
となった形



注口土器（縄文時代晩期）
青森県つがる市 亀ヶ岡遺跡



玉類 [勾玉]
（縄文時代後期及び晩期）
青森県青森市 玉清水遺跡ほか



壺（縄文時代晩期）
青森県つがる市 亀ヶ岡遺跡



鉢（縄文時代晩期）
青森県つがる市 亀ヶ岡遺跡

表紙及び遺物：弘前大学蔵 小川忠博撮影
大森勝山遺跡 写真提供：弘前市教育委員会

南島の造形



室川下層式土器



仲泊式土器



仲泊式土器



面縄前庭式土器



面縄東洞式土器



面縄東洞式土器

仲泊 a 式土器



荻堂式土器



荻堂式土器



※本書は平成 30 年度企画展「北谷の縄文」で配布したパンフレットを改訂したものです。

[発行：令和元年 9 月]

◇北谷町教育委員会

〒904-0192 北谷町字桑江 226 番地
(098)936-3159

◇印刷 / (株) 東洋企画印刷

〒901-0306 糸満市西崎町 4-21-5
TEL (098)995-4444